信州大学附属図書館報

ISSN 1342−8322

花信

第5号 1999.3

Kashin : The Shinshu University Library Bulletin

目　次

急がば回れ …… 1
附属図書館事務一元化について …… 2
Windows／ＮＴシステムへの変更 …… 2
「信州大学における電子図書館機能の充実・強化へ向けての実施計画報告書」… 3
附属図書館講演会の実施報告（１・２） 8
お知らせ …… 11
（入退館システム・自動貸出装置）
（日曜・土曜開館）
（SwetScan提供開始）
（学生アンケート）
（本学関係（者）著作寄贈図書）
分館の現況（繊維学部分館） …… 13
附属図書館運営委員会名簿 …… 15
業務日誌 …… 16
人事異動 …… 16

急がば回れ

農学部分館長　太田克明

本年１月に全学一斉に行われた学生の図書館利用に関するアンケートの学部分の集計作業を行った。図書が少ない、古い、学習・研究に必要な図書・雑誌がさっぱりない、等々、案の上、苦情の嵐である。なかには、生協の書棚の方がまし、国立と言えども余りにも情けない、などの痛烈極まるコメントもある。一昨年行われた教官アンケートでも全学を通じ蔵書の質・量に関する限り回答は同じようなもので、満足と言う答えは１割にも充たず、７割以上が不満と答えていた。閲覧室の広さ、開館時間、OPAC等のデータベース構築‥‥等々、現在図書館に寄せられる苦情、要望は様々であり、枚挙に遑ないほどであるが、しかしいずれも十分な蔵書、文献があっての話である。いかに閲覧室、ロビーが快適、検索用端末機の数も十分、土・日まで含め２４時間いつでも利用可能となっても、肝腎の利用出来る書籍、文献が碌にないとなれば図書館としては茶番としか言いようがない。研究用の場合はそれでも最近の電子機器類の目覚しい発達のお陰で、本学の場合も文献サービス、電子情報入手など遅々ではあるが改善がみられ始め、それにつれて利用度も急激に増加してきた。しかし、学習図書館機能となるとやはりまだ冊子体の利用が主流であり、そうなると何と言っても蔵書の質と量が問題である。欲しい参考書を一途に探すだけなら電子情報も有効だろう。しかし、書架の間をうろつき、時折これと思うのを手に取りパラパラとめくって思わぬ収穫にありつく嬉しさは冊子体ならではであり、それが学習の喜びにもつながる。一歩専門領域から離れれば教官、研究者も良い参考書、良い学習指導書を求める点では学生と同じである。さらに言うなら、良い本を幅広く与えることで、教官が学生を教える時間、労力が大幅に節約されるだけでなく、それらで学んだ学生から逆に、思わぬ発想、思わぬ知識を与えられる場面も多くなろう。学習用図書と言うと、ともすれば学生のため、学生教育のためとだけとらえ、それよりは研究用専門書の充実をと考え勝ちである。しかし、少し見方変えるなら、それはそのまま自己の研究の発展につながるものであり、下手な専門書一冊よりはるかに率よく、かつ幅広く、研究室、学部、大学における研究の活性化、底上げをもたらそう。

（おおた かつあき）

附属図書館事務一元化について

平成11年4月から、旭キャンパス医学部分館、医療技術短期大学部図書室で従来処理していました図書館資料の受入整理業務を、中央図書館で一元的に処理することになりました。このことにより、両部局からの図書の購入申込手順等が下記のとおり変更になります。

医学部・医療技術短期大学部に所属される教職員の方々には、ご理解のうえよろしくお取り計らいください。

記

1　**購入申込**　購入の申込方法は、今までどおり①用紙による申込②メールによる申込のいずれでも差し支えありませんが、各部局で使用されている専用申込書で医学部分館、医療短大図書室に購入を申し込まれる場合、中央図書館への申込書送付日数が加わることになります。（できるだけメールによる申込システムをご利用ください。）

2　**問い合わせ**　申込図書に関する納入状況などの問い合わせは、中央図書館の図書情報係（内線2494）にご連絡ください。なお、雑誌については、医学部分館、医療短大図書室納品となりますので、従来どおりそちらにお問い合わせください。
（メールによる申込システムを利用されれば、自端末からいつでも確認できます。）

3　**その他**　図書・雑誌購入経費は各部局から附属図書館への予算振替になります。
（年度当初・年度途中及び年度末に適宜振り替えてください。）

（情報管理課）

CD－ROMデータベースネットワーク検索システム
OPTI－NET／Netware システムから Windows／NT システムへの変更について

ネットワークを使って全学へ提供している附属図書館 CD－ROM データベースネットワーク検索システムのうち、OPTI－NET／Netwareシステムを新年度できるだけ早い時期に変更します。従来、このシステムを研究室等から利用されていた方は、お手数ですが設定の変更をお願いいたします。詳細につきましては、追ってお知らせします。新しいシステムは Windows／NT によって管理されますので、クライアント側の設定及び利用が格段に容易になります。

これまで提供してきた OPTI－NET／Netware システムは、クライアント側の環境設定が極めてむずかしかったため研究室のLAN接続パソコン等からの利用が困難でした。本学で提供している各 CD－ROM の検索ソフトが全て Windows に対応されたことと、システム導入経費が今年度予算配分されたことにより、新システムに変更します。新サーバでは基本的にWebブラウザを利用するため、検索ソフトの自端末へのインストールが簡単にできます。

新しい検索システムの稼動へむけて、現在準備作業を進めていますが、新サーバによるクライアント側の条件は、以下のとおりです。

- Windows 95以上、またはWindows NT Workstation
- ブラウザ Netscape 3．x、Explorer 3．x 以上
- Mac は次のソフトを準備すれば、一部 CD－ROM が利用可能です。
  ソフト名：DAVE for Macintosh Version 2.1
  Macで利用可能なＤＢ：朝日新聞見出しDB（50years）
  OED 2（Oxford English Dictionary）

（資料サービス係）

電子図書館機能の充実・強化に向けて

図書館は冊子体図書館であると同時に電子体図書館であることが要求されております。信州大学附属図書館運営委員会では、学術資料を体系的に収集・蓄積し、利用者である教職員や学生、さらには地域社会のニーズに応じて提供するという本来の役割を充分に考慮した上で、「本学における電子図書館機能の充実・強化」について検討し、実施計画報告書としてまとめましたので報告します。今後はこの報告書に基づいて、実施可能な事項から信州大学附属図書館運営委員会に諮りながら実施して行くことになっておりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

以下に報告書の全文を掲載します。

附属図書館長　野　村　俊　明

信州大学における電子図書館機能の充実・強化へ向けての実施計画報告書

（目　　次）

1　基本方針……
2　財政基盤の確立……
3　実施計画……

平成１０年１２月１４日

信州大学附属図書館運営委員会

電子図書館機能検討ワーキンググループ

信州大学における電子図書館機能の充実・強化へ向けての実施計画

この実施計画は、ワーキンググループでの検討の結果、信州大学として望ましい、図書館における学術情報の電子化及び電子情報サービスに関する方向性を提示するものである。

もとより、電子図書館機能の充実・強化というテーマは、近年におけるコンピュータ及びネットワーク技術の急激な進歩に密接に対応したかたちで、教育研究の支援に資することを目指したものである。その指針として、本計画案は、学術審議会の建議「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」（平成８年）を踏まえたうえで構想したものである。従って、建議中の「電子的情報資料を収集・作成・整理・保存し、ネットワークを介して提供するとともに、外部の情報資源へのアクセスを可能とする機能をもつもの」という電子図書館の定義が意識されている。

なお、電子図書館機能の充実・強化にともなって、学内ＬＡＮに大量の画像情報が通ることが想定される。このことはネットワークのトラフィックの著しい増大を意味し、現状の回線容量では良好なレスポンスが期待できないことから、回線容量の増強は不可欠である。

１　基本方針

実施計画策定の前提として、６項目にわたる基本方針を以下に記述した。これらは、相互的且つ並列的に関連をもったものとしての展開が想定されている。

（１）目録情報、貴重資料等の電子化

ア　蔵書の有効利用、資源の共有化を図るため、本学の所蔵する資料の目録所在情報の遡及入力は全点入力を目標とした事業として推進する。

イ　本学の特色あるコレクションをマルチメディア・データベースとして構築し学内外への公開を行うために、本学所蔵の貴重書（それに準じるものを含む）及び学内で生成される学術情報・紀要等の電子化を推進する。

（２）電子化情報の収集

現在、CD－ROM等のパッケージ型の情報資料や、ネットワークを介して提供されるネットワーク型の学術情報等、数多くの電子化資料が出現している。これらの膨大な情報は学内のニーズに合致した形で効率的に収集或いは利用すべきである。また、収集にあたっては費用対効果にも配慮し、全学的に利用頻度の高いものの選定が望まれる。

（３）情報提供

作成・収集した情報はホームページ等を通じて積極的に発信するとともに、ネットワーク上に公開されている情報へのアクセスについてナビゲート機能を果たすことも重要と考えられる。

また、情報の発信は、図書館からの使いやすいインタフェイスを基盤としつつも、研究者・学生等利用者の情報需要からのフィードバックを吸収する仕掛けを有した弾力的な方法を取るべきである。

（4）連携

情報システム及びデータベースの構築等に関して総合情報処理センターとの更なる連携を強化し、大学全体の情報集積・発信機能と融合した情報サービスの展開を指向する必要がある。

また、資料の電子化等にあたっては関係分野の研究者による支援・協力体制を整備して、学問的に裏付けのあるデータベース構築を遂行することが望ましい。

（5）情報リテラシー教育への支援

情報サービスは、カリキュラムや教育上のニーズとも関わりをもち、教育活動の円滑な支援を射程に置くことが望ましい。従って、情報利用教育或いは授業と関連した情報等の収集及び活用についての支援が効率的に実行可能な環境を整える必要がある。また、電子図書館機能に対応した、図書館利用ガイダンスの豊富化・高度化が望まれるところである。このことのために、図書館職員の養成を含んだ十分な利用者支援体制の整備を推進する。

（6）統合型情報システムの構築

電子図書館システムは、図書館情報システムやＣＤ－ＲＯＭデータベース提供システム等と連携をもった統合的なものとして構築されるべきである。

2　財政基盤の確立

附属図書館が電子図書館機能の充実・強化を遂行するにあたっては、経常的な予算措置のなかで充実した情報サービスの継続を期待するには明らかに限界がある。そこで、以下に掲げる項目に沿った安定した財政基盤を新たに確立することが必須の条件である。

（1）資料等電子化経費

・目録情報の遡及入力のための経費

・貴重資料・学術情報・紀要等の電子化のための経費

（2）資料整備経費

・ＣＤ－ＲＯＭ等市販データベースソフト購入経費

・電子ジャーナル等ネットワーク情報の購入経費

（3）ハードウエア経費

・電子化されたデータを蓄積・保守・管理するデータベース・サーバのための経費

・収集した電子化情報を格納・サービスするサーバのための経費

（4）開発経費

・電子図書館研究開発体制の整備に要する経費

・統合型情報提供システム開発経費

3　実施計画

事　業　項　目	現　　状	実　施　計　画
1　目録情報の遡及入力	平成１０年３月末現在で約２０万冊が入力済である。	残りの入力対象の約８０万冊中第１期５ヶ年計画として４０万冊を入力する。 入力は、出版年の古い資料の利用頻度の高い人文社会系にウエイトを置き、以下の順で行う。 図書館内（分館室含む）　開架図書→研究室等から各館室への返却図書→図書館外貸出（配架）図書
2　貴重書等のデータベース化	中央館第５閲覧室所蔵の古文書のデータベース化を試行中であり、今年度中に３０点前後の書誌情報及び画像情報をデータベース化しホームページで公開予定である。	現在進行中の古文書のデータベース化を中心としたマルチメディア・データベースを構築する。対象資料は、古文書のほか本学の特色を表現する資料を順次選定する。 当面は、古文書約３５００点を対象とした目録及び画像のデータベース化を行う。
3　学内生成情報のデータベース化	学内発行紀要の目次情報はホームページを経由してアクセス可能となっている。	紀要及び学位論文の全文情報を始めとして、学内で生産される学術情報を調査のうえ、実施可能なものからデータベース化を図る。 当面の対象として１５点の紀要等がある。
4　ＣＤ－ＲＯＭ等データベースの整備	雑誌記事索引、日本経済新聞、SwetScan。	今後全学的に利用頻度の高いものを選定し、予算の範囲内で随時提供することとする。
5　電子ジャーナル等オンライン情報へのナビゲーション	幾つかの無料電子ジャーナル、他大学作成の電子ジャーナルリンク集がホームページを経由して利用可能となっている。	電子ジャーナル等オンライン情報は、体系的な調査整備のうえ、ナビゲート機能を確立する。 また、有料の電子ジャーナルは、冊子体重複購入誌の見直しをもとに経済的な購入を検討する。

6　ホームページの充実	蔵書検索、広報、申込システム、利用者支援リンク集等。	蔵書検索以外の蓄積データ検索機能を強化する。 また、１１の統合型情報システムとの親和性を考慮した充実を図る。
7　利用者用端末の整備	中央館８台、分館室各３～４台。	中央館３０台、分館室各５台程度の増強を図る。
8　電子図書館の研究開発	（現在なし）	学内の研究者による支援の制度化を図り、電子図書館の研究開発を推進する。
9　ＬＡＮを含む学内ネットワークの有効活用の検討	情報化基本事項検討委員会専門部会に中央館から委員を派遣し検討に参画中。	本実施計画案の実現そのものがＬＡＮの有効活用に直結するが、これはネットワークのトラフィックの著しい増加をもたらす。従って、良好なレスポンスを確保するためにはキャンパス間の回線容量の増強が不可欠である。 このことから、回線容量の増強を前提とする有効活用を提言する。
１０　情報リテラシー教育の支援	図書館利用ガイダンス及び授業の補助を通した支援を行っている。	図書館利用ガイダンスの豊富化・高度化に対応可能な形での図書館職員の資質向上を図る。 また、授業の補助は電子図書館機能実現の経過に相即して遂行する。
１１　統合型情報システムの構築	（現在なし）	既存のコンピュータ資源を有効利用しつつ、電子図書館システム、CD－ROM等データベース提供システム、図書館情報システムが連携をもって効率よく稼動するための統合的な情報システムを構築する。 このことにより、ユーザフレンドリなインタフェイスの提供を指向する。

平成10年度附属図書館講演会について

今年度は、平成10年11月及び平成11年2月の2回の講演会が開催されました。いずれの講演会も附属図書館職員のみではなく、広く関係者に案内して行われました。

以下にその概要をお知らせします。

＜第1回＞

日　時	平成10年11月26日（木）午後2時から
場　所	旭会館大会議室
講　師	刀川眞氏（株式会社ＮＴＴデータ・システム科学研究所主任研究員）
対　象	教職員
演　題	情報システム、その社会的問題と今後の役割
概　要	情報通信システムが広く社会に浸透するに伴って、様々な社会的問題が生じつつある。これらに対応するには問題の本質把握が不可欠であるが、さらに一歩踏み込んで情報システムの社会的な役割自体を問い直す必要もでてきている。そこで情報通信システムのサービス面における効用と社会的問題の整理から問題の本質を考察すると共に、これからの情報システムが果たすべき役割として従来の効率向上だけでは済まない大きな考え方の変革が求められることを提示する。[刀川主任研究員]

＜第2回＞

日　時	平成11年2月8日（月）午後2時から
場　所	信州大学SUNS講義室・会議室（松本、長野、西長野、上田、箕輪各会場）
講　師	高山正也氏（慶應義塾大学文学部教授）
対　象	図書系職員（近隣の公共図書館職員も含む）
演　題	デジタル環境下での図書館・情報サービスのあり方
概　要	昨今、図書館の世界では電子出版と、それに対応した電子図書館（デジタル・ライブラリー）システムの開発・導入に関心が集まっている。そこで、電子図書館論を整理して、三つのアプローチから電子図書館とそこでのサービスのあり方について考える。そして図書館サービスは人間が支えるものとの観点から、デジタル環境下での期待される職員像にも言及する。[高山教授]

2回目の講演会は、近隣の大学図書館や公共図書館にも呼びかけて実施したもので、信州大学のほか、大学・高専・短大5校、公立図書館4館からの参加者がありました。

以下は、当日配付されたレジュメの概略です。

デジタル環境下での図書館・情報サービスのあり方

高　山　正　也（慶應義塾大学　文学部）

1．はじめに
2．大学におけるデジタル環境の形成
2．1情報のデジタル化によるサービスの変化
(1)リモート・アクセスが可能
(2)同時複数利用が可能
(3)リアルタイム利用が可能
(4)複製、編集、加工の容易さ
(5)サービスへの課金
2．2新サービス展開の可能性と問題の発生
(1)情報サービスの高度化
(2)サービスの高度化に伴う問題点
3．情報資源へのアクセス
3．1書誌的なアクセス
3．2物的なアクセス
3．3言語的なアクセス
3．4概念的なアクセス
4．情報技術の発達と図書館の変容
4．1紙媒体図書館
4．2機械化図書館
4．3電子図書館
5．電子図書館と大学教育
5．1電子図書館論出現の背景
(1)電子出版への対応
(2)電子技術の発達
(3)未来型図書館論
5．2電子図書館実現のための要素
(1)情報のデジタル化
(2)情報インフラの整備
(3)デジタル・コミュニティの開発
①図書館員のデジタル対応
②情報の創造者（著者）のデジタル対応能力
③利用者のデジタル対応能力
6．図書館員に求められる条件
6．1電子図書館への対応
6．2図書館リテラシー教育への対応
6．3図書館専門職員養成のカリキュラム例
(1)日本の大学基準協会の基準：図書館情報学教育基準
①基礎部門：
②メディア・利用部門
③情報組織部門
④情報システム部門
⑤その他
(2)カリフォルニア大学バークレー校（School of Information Management and Systems）の事例
①情報学
②情報社会学
③情報の組織化と検索

④情報管理システム

7．情報専門職としての組織内情報サービス担当者の資質と能力

7．1専門的な能力

①情報資源の内容を熟知し、厳しく評価、判断、選別できる
②組織とサービス対象者の業務内容に必要な専門知識を持つ
③組織の経営戦略にかなった便利で効率の良い情報サービスを開発・管理
④情報サービスの利用者を訓練・教育し、情報のリテラシーとマインドを開発
⑤情報ニーズに応える付加価値のある情報サービスやプロダクトの開発と売り込み
⑥情報の収集、整理、組織化、提供において適切な情報技術の利用
⑦組織幹部に対する情報サービスの重要性のアピールと説得
⑧利用しやすい情報サービスの種類の開発
⑨情報利用の結果を評価
⑩情報サービス全体を客観的に評価し、その結果に基づき改善をはかる
⑪情報問題について、組織における権威として、情報コンサルタントとなれる

7．2個人的な資質

①優れたサービス気質を持つ
②チャレンジ精神に富み、チャンスを求める
③広い視野を持つ（木を見て、森も見る）
④相互利益となる協力関係を常に模索する
⑤信頼できる人間関係を作るのが上手い
⑥効果的なコミュニケーション能力を持つ
⑦チームの一員として、他者と上手く働く
⑧リーダーシップが発揮できる
⑨業務の企画立案・計画設定ができる
⑩向上心を持ち、生涯学習や自己のキャリアアップを追求する
⑪起業家精神を持ち、新たなチャンスを作り出せる
⑫情報専門職としての自覚を持てる
⑬変化する時代や環境に柔軟に対応できる

7．3専門職の養成

(1)必要とされる専門知識の一例

①情報学
②情報の組織化と検索
③情報の社会科学
④情報管理システム

(2)教育されるべき科目の一例

①情報システムの設計と管理
②情報資源の管理
③情報教育
④情報技術の評価、導入、維持、及びネットワーキング
⑤情報サービス問題に関する基礎的知識と技能
⑥情報分析能力(competitive intelligence)
⑦情報利用者と情報システム技術者との仲介能力
⑧情報サービス及び情報商品の企画と生産能力
⑨組織の情報政策を分析・立案する能力
⑩情報リテラシーを利用者に植え付けるための情報技術
⑪文書館とレコード・マネージメント

高山先生はこの中で、特に5（3）デジタル・コミュニティの開発を強調されました。本学附属図書館としても、この「デジタル対応能力」（情報リテラシー）の教育支援に関する取り組み強化を新年度へむけて準備中です。

お知らせ

◆ 中央図書館に入退館システムと自動貸出装置が導入されました。◆

入退館システム

閲覧室に入る際に学生証（または入館証）を装置に読み取らせるとゲートが開き入館できます。また、退館ゲートは貸出手続きを忘れた図書館資料を持っている場合には開きません。

このシステムは全国の殆どの大学図書館で導入されています。

自動貸出装置

自動貸出装置は、図書の貸出手続きを自分で行うことができる装置です。画面の指示にしたがい学生証と図書のバーコードを装置に読み取らせると、返却期限等が印字されたレシートが出て操作が完了します。カウンターで手続きをする必要はありません。

この装置は4月からの運用を予定しております。

（情報サービス課）

◆ 新年度より中央図書館で日曜開館、教育学部分館で土曜開館を通年実施 ◆

平成11年度より中央図書館では、日曜開館を通年で実施することになりました。

中央図書館では、これまでも試験期のみ日曜開館を実施してきましたが、利用者は1日平均400名を超え、土曜開館の利用者は1日平均271名（平成10年度）となっています。

日曜開館の実施は、本学研究者・学生の利用サービスを拡大することが主な目的ですが、同時に信州大学図書館の持っている学術情報を積極的に公開して、地域住民の「生涯学習活動」を支援するための一環としても位置づけています。これを機に、多くの方が中央図書館を利用いただければと願っています。

また教育学部分館は、土曜開館を通年で実施することになりました。

開館日程・時間は各図書館ホームページの「開館カレンダー」等でお知らせします。

◆ SwetScan 提供開始 ◆

文書等ですでにお知らせしているとおり、平成１１年１月から雑誌目次データ提供システムSwetScan（スエッツスキャン）の提供を開始しました。

現在、ＯＰＡＣ（信州大学附属図書館オンライン目録）へのリンクと、文献複写依頼機能について、準備作業を行っております。

URL:　http://shinlis8.shinshu-u.ac.jp/swets/

（資料サービス係）

◆ 図書館の利用に関するアンケート調査（学生用）について ◆

信州大学附属図書館は益々の利用者サービスを図るため、学生利用者のアンケート調査を行うことになり、1月下旬より2月上旬の間に、中央館はじめ各分館、室、共にアンケート調査を実施いたしました。

来館された学生利用者の多くの方々のご協力をえて、全館、室、合せて1,051件の回答が得られました。

この調査結果は次号にご報告申し上げるとともに、この結果を活用し、今後の図書館サービス業務改善の参考にさせて頂きたいと思っております。

このアンケートに、ご協力いただいた方々にあらためてお礼申し上げます。

本学関係(者)著作寄贈図書一覧

書　　名	発　行　者	出版年	寄贈者	所　属
＊ 中央館				
キ・ケリの研究	和泉書院	1998	加藤浩司	人文学部資
歌集 竹叢の風（ドイツ語短歌集 第3集）	みぎわ短歌会	1998	手嶋竹司	名誉教授
概説 民法	勁草書房	1998	後藤泰一	経済学部
小谷朗教授退官記念誌	信州大学医学部歯科口腔外科学教室	1998	歯科口腔外科学教室	医学部
＊ 教育学部分館				
20世紀数学教育思想の流れ	産業図書	1997	吉田稔	教育学部
地附山地すべり災害の真実	地附山地すべり訴訟原告団	1998	筒井健雄	教育学部
「信稜」 信州大学山岳部部誌	信州大学長野山岳部部誌編集委員会	1998	信州大学山岳部	
＊ 医学部分館				
The 1997 Nagano Symposium on Sports Science	Cooper Publishing Group	1998	能勢　博	医学部
内科学 ―広く医療、医学に携わる方々へ―	望月一郎1995		望月一郎	元医療技術短期大学部
＊ 農学部分館				
タンパク質の科学（食品成分シリーズ）	朝倉書店	1998	大谷　元	農学部
地附山地すべり災害の真実	地附山地すべり訴訟原告団	1998	筒井健雄	教育学部
Fourth Asian Symposium on Animal Biotechnology.	Shinshu University	1998	辻井弘忠	農学部
ソバの絵本（そだててあそぼう 8）	農山漁村文化協会	1998	俣野敏子	名誉教授
Tranvert. 11(8). 特集 信州そば学	東日本旅客鉄道	1998	俣野敏子	名誉教授
＊ 繊維学部分館				
Fortran90	森北出版	1998	新井親夫	繊維学部

分館の現況：繊維学部分館報“Library”について

繊維学部分館

皆さんは、“Library”をご存知でしょうか？ 今読んでいらっしゃるこの「花信」は信州大学附属図書館の館報ですが、“Library”は、繊維学部分館で発行している館報です。現在、分館で館報を発行しているのは繊維学部だけであると認識しております。

今回は、この“Library”についてご紹介させていただきます。

“Library”初号の発行は、昭和50年（1975）7月でした。「Libraryという仮の名のパンフレット」（編集後記）とあるように、これはまず予告号として発行され、“0号”と冠されています。図書館からの初めての刊行物として果たして学部に認知されるのか、継続して刊行していくことの大変さ、不安と云ったようなものが伺えます。残念ながら、創刊当時の様子を知る者は最早分館には居りませんが、復刊に寄せられた篠原昭先生（元学部長、分館長）の記述によりますと、当時図書係長で、図書館に対する並々ならぬ情熱と識見をお持ちであった清水重富さん（その後中央館に移られ最後はがんとの壮絶な戦いをされて現職で亡くなられた）の提案で発刊されたとのことです。（B5版4P，受入図書案内 平均6P，タイプ打）

記念すべき“Library”0号の内容は次のようなものでした。

開かれた図書館とするために	小山長雄分館長
外山亀太郎博士と「蚕種論」	長島栄一先生
受入図書案内	
館員担当コラム欄	
「図書館と数字」「参考質問」「照会Q＆A」	
「日誌抄」「告知板」	

図書館考、専門図書の解説を中心にした誌面作りが伺えます。

「図書館の数字」では、‘蔵書数 67,573冊’（現在 114,494冊）

「告知板」には、‘夏季休業中ばく書のため、8月11日～23日までの13日間休館’の記事もあります。3ヶ月に一度の季刊でした。

しかし、昭和52年（1977）9月発行の第7号を最後に休刊となります。5月に清水係長の突然の異動がありました。また、学科増設や大学院新設による学生の増加、電算化の取り組みなど新しい図書館業務への対応に迫られてきたようです。

けれども、平成5年（1993）6月には、16年の歳月を経て“Library”が復刊しました。教育学部分館報「はいまつ」の復刊にも触発され、当時分館長であった篠原先生の強力な助言をいただいての復刊号（通巻第8号）の内容は次の通りでした。

Library の復刊に寄せて　篠原　昭分館長
図書紹介「日本の伝統の色見本帖」　嶋崎昭典先生
ＯＰＡＣ利用案内
平成４年度 学生のための共同推薦図書案内
分館通信（職務分担案内、図書館の数字、分館日誌、告知板、編集後記）

編集方針は先人を引継ぎ、書誌解題、読書論などが中心ですが、図書館利用案内と云った記事も組まれるようになりました。年４回発行の季刊誌で、以来地道に受け継がれ、平成11年１月には第30号を数えるまでになりました。

「図書館所蔵及び新規受入図書を利用者に紹介し、図書の利用促進を図り、また、図書館の案内、図書館員の声、利用者の声を掲載し、図書館と利用者をつなぐこと」を目的として、これまでに59件もの原稿が寄せられてきました。時代の流れの中で、邦文タイプからワープロ、パソコンへと移り、情報の電子化に伴い、ご紹介する内容も変化してきています。

今、図書館は情報メディアや情報流通経路の変化によって激変期の渦中にあります。そんな中で“Library”は、何よりも“図書館と利用者をつなぐ”媒体としての役割を大事にして、これからも刊行を続けていきたいと考えています。親しみやすい図書館作り、その一端を担うのが“Library”の使命、といえるでしょう。

そうはいっても、通常業務に加えて年4回の発行を続けていくことは、楽なことではなく、「面白かった」「役に立った」という利用者の皆さんの声を励みに頑張っているところです。
この機会に皆様の今後とものご協力、ご支援を広くお願いする次第です。
＊　“Library”は第17号からインターネットでも公開 しています。ご覧ください。
URL:http://shinlif1.shinshu-u.ac.jp/online.html

（繊維学情報係）

附属図書館運営委員会名簿

（平成11年3月1日現在）

部局	官職	氏名	任期	収書委員	備考
附属図書館	附属図書館長	野村俊明	10. 8. 1～12. 7.31	○	
人文学部	助教授	中嶋聞多	10. 5. 1～12. 4.30		
	助教授	佐倉由泰	10. 4. 1～12. 3.31	○	
教育学部	分館長	馬場将光	10. 4. 1～12. 3.31	○	
	教授	松岡樂	10. 4. 2～12. 4. 1		
経済学部	教授	青才高志	9. 5. 1～12. 4.30		
	助教授	柳町晴美	10. 5. 1～12. 4.30	○	
理学部	助教授	松田智充	10. 5. 1～12. 4.30		
	教授	佐藤利幸	10.12.16～12.12. 5	○	
医学部	分館長	福島弘文	9. 4.10～11. 4. 9	○	
	教授	村瀬澄夫	10. 6. 1～11. 5.31		
工学部	分館長	田坂雅保	10.10.16～12.10.15	○	
	教授	田中道彦	9.10.31～11.10.30		
農学部	分館長	太田克明	10. 4. 1～12. 3.31	○	
	教授	柴田久夫	10. 4. 1～12. 3.31		
繊維学部	分館長	中沢賢	10. 4. 1～12. 3.31		
	助教授	小西哉	9.11. 1～11.10.31	○	
事務局	事務局長	渡部蘊	8. 7. 1～		

オブザーバー

医療短大	助教授	川上由行	9. 4. 1～		

業務日誌

平成10年

10月5-6日　平成10年度北信越地区医学図書館員研修会
（福井医大／医学情報係：内海）

10月29-30日　平成10年度北信越地区国立大学図書館研修会（長岡技大／教育学情報係：瀬尾、医学情報係：大内、工学情報係：城倉、農学情報係：鈴木）

11月5-6日　関東甲信越静地区著作権セミナー（東京都／学術情報係：淵井）

11月6日　第3回国立大学図書館協議会理事会（東北大／部長）

11月13日　電子図書館機能検討ワーキンググループ（第4回）

11月13日　附属図書館運営委員会（平成10年度第4回）

11月16－20日　第3回情報ネットワーク担当職員研修（ネットワーク管理Ⅰ）
（学術情報センター／工学情報係：城倉）

11月19日　平成10年度北信越地区国立大学附属図書館事務（部・課）長会議
（石川県辰口町／部長、管理課長）

11月26日　平成10年度第1回附属図書館講演会（旭会館）：テーマ「情報システム、その社会的問題と今後の役割」 講師：株式会社ＮＴＴデータ通信システム科学研究所　刀川眞主任研究員

12月14日　電子図書館機能検討ワーキンググループ（第5回 SUNS使用）

12月14日　附属図書館運営委員会（平成10年度第5回 SUNS使用）

平成11年

1月5日　ブック・ディテクション・システム（退館システム）運用開始（中央館）

1月19－20日　平成10年度ＩＬＬシステム地域講習会担当者連絡会議
（学術情報センター／資料サービス係：田村）

1月21日　平成10年度国立大学附属図書館事務部長会議（三重大学／部長）

1月28日　附属図書館運営委員会（平成10年度第6回 SUNS使用）

2月1日　入館システムテスト運用開始（中央館）

2月8日　平成10年度第2回附属図書館講演会（SUNS使用）：テーマ「デジタル環境下での図書館・情報サービスのあり方」 講師：慶応義塾大学文学部　教授　高山正也 氏

人　事　異　動

1月29日　辞　職
有坂　里佳（情報サービス課学術情報係事務補佐員）

2月28日　辞　職
徳永　順子（教育学部分館教育学情報係事務補佐員）

花　信　第5号　1999年3月31日
■ 編　集　花信編集委員会（菅原・金井・石坂・田村・武田）
■ 発　行　信州大学附属図書館
〒390-8621 松本市旭3－1－1
TEL 0263 (37) 2174・FAX 0263 (33) 5833
URL:http://shinlis2.shinshu-u.ac.jp
E-mail: jja0141@gipac.shinshu-u.ac.jp